

中国イノベーションの震源地・深圳

東京大学 丸川知雄

1988年の深圳は大勢の出稼ぎ労働者が働く工業団地だった。1992年に行った時にはここにアミューズメントパークが加わり、少し楽しい街になっていた。1993年に行った時には、高級ホテルのロビーに客を探す娼婦がたくさんたむろしていた。1999年には、ファーウェイ（華為技術）が急成長をするなど、深圳独自の企業が出てきた。2006年に行った時には、他のメーカーのブランドを借りて携帯電話を作る業者など、ユニークなビジネスがあつて面白かつた。2010年には、そうした怪しげな携帯電話メーカーが深圳で1000社を超え、怪しげな携帯電話が中国の農村や途上国へ向けて売りさばかれていた。いま深圳は企業による知的財産権の申請数が北京や上海をも上回り、中国でイノベーションがもっとも盛んな都市となった。

深圳は「変わる中国」をもっとも体現する都市であり、数年ごとに過去と違った顔を現す。人口の7割は深圳の戸籍を持たず、人がたえず入れ替わり、若返っている。その一人あたり所得は日本の都道府県の一部をまもなく追い越すだろう。この分科会では中国経済のダイナミズムを生み出す重要なエンジンの一つとなった深圳の最新の状況を報告し、深圳というこの特異な都市の成り立ちについて考察する。

報告

丸川知雄（東京大学）「深圳・中国イノベーションの首都」

木村公一朗（アジア経済研究所）「スタートアップの増加と中国経済の変化」

伊藤亜聖（東京大学）「デジタルドラゴンヘッド・深圳—無人航空機（ドローン）産業の事例からの検討」

討論

中川涼司（立命館大学）